



仙台市若林区東部沿岸地域 復興・地域おこし政策 － 現状分析編 －

一般社団法人 ReRoots



震災から8年目を迎え、若林区東部の七郷地区、六郷地区の現状はどのようになっているでしょうか。

2011年から10年目を節目に復興期が終えるのを目処に、ReRootsでは今後10年先の若林区の地域おこしを展望して、現状分析と課題解決の政策立案を行いました。

ぜひ、みなさまからの多くのご意見をいただくとともに、一緒に地域おこしを進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

2019年3月



行政政策の状況と評価について

仙台市震災復興計画は平成28年3月に終了し、市としては復興の目処がついたと評価しています。今後「しなやかで強靱な都市」づくりに向けて防災環境都市づくり・インフラの強靱化・震災の記憶の伝承を中心に取り組んでいく目標を掲げています。

そのもとで七郷・六郷地区は「農と食の

フロンティアゾーン」のもと、圃場整備が完了した大規模農地を活用しての効率的かつ高い収益性をもたらせる先進的農業地域と位置づけられています。またコミュニティ面や防災面においてはかさ上げ道路建設など若干の工事が残されていますが、それらが完了すれば復興事業は終了することとなるでしょう。

七郷沿岸地域について

○コミュニティの状況

震災前は、荒浜地区988世帯（石場含む）、笹屋敷・神屋敷地区合わせて84世帯の合計1,072世帯が生活していました（H22.10.1）。被災後、仮設住宅や民間借り上げアパートに避難していた住民の多くは、荒井東・西・南地区を中心に復興公営住宅に入居し、東部道路の西側へ防災集団移転しました。被災地内では荒浜地区が居住禁止となってしまうため、石場地区・神屋敷北地区の防災集団移転が行われ、結果的に七郷地域には243世帯（荒浜89世帯、神屋敷18世帯、神屋敷北56世帯、笹屋敷80世帯）が生活しています（H30.10.1）。もともとの笹屋敷・神屋敷地区は8～9割が現地再建し、さらに神屋敷北地区や石場地区が加わったことにより、地域の世帯数はほぼ変わらないか、やや増えたという状況です。

地域の町内会活動は被災前とほぼ同様に再開し、盆踊りなどの祭りも行われています。コミュニティの維持機能としては再生できたといえます。

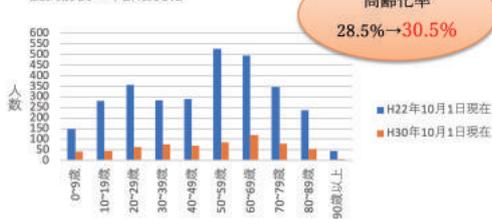
ただ、小中学生の子供が減り、働き盛りの世代が都市部へ流出し、高齢化が進んでいるという課題はあります。高齢化率は30.5%（H30.4.1）で、仙台市の高齢化率23.3%（H30）と比べると、決して楽観視できる状況ではありません。ですが、基本的な町内会活動や祭りは再開され、コミュニティの自活能力もあり、地域の農業を支えている若手も存在しています。

今後を考えれば荒井地区を中心とした東部道路の西側の開発によって更なる人口増加や都市化が起こる一方で、東側は荒浜地区の跡地利用が進むのみで地区の状況は変わりません。そのため10年先を展望すると、笹屋敷・神屋敷地区では現在の町内会役員世代が徐々に世代交代していきながら、ゆっくり過疎化が進み、コミュニティの維持機能が徐々に難しくなって行くでしょう。すぐに問題が表面化するわけではなく、じわりじわりと進んでいくと考えられます。

○農業

農業においては、荒浜、笹屋敷、神屋敷のいずれの地区も中心となる法人が存在しています。農協のサポートがあったり、独自の販路を形成したり、六次化をしたりと、各法人が工夫を行って、特徴ある経営を行っています。

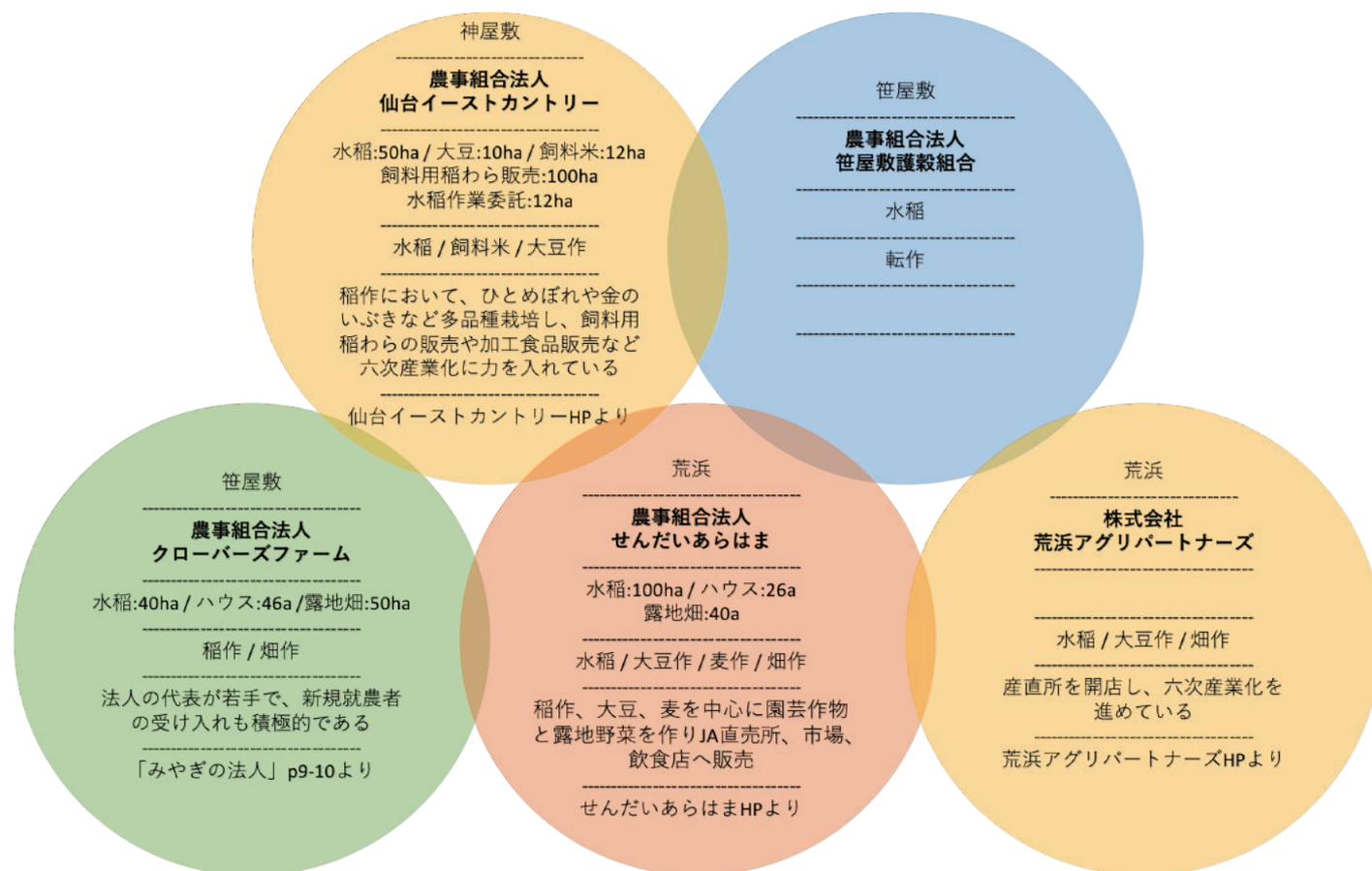
笹屋敷/神屋敷/石場/荒浜計
震災前後の年齢層変化



高齢化率
28.5%→30.5%

・仙台市 HP「町名別年齢（各歳）別住民基本台帳人口」
<http://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/index.html>（最終閲覧日 2019/2/10）

○各地区の農業法人の一覧と概要



- ・仙台イーストカントリー HP <http://www.sendaieast.jp/business.html>（最終閲覧日 2018/12/28）
- ・農事組合法人せんだいあらはま <http://www.sendai-arahama.jp>（最終閲覧日 2018/12/28）
- ・荒浜アグリパートナーズ <http://www.arahama-agri.jp> 最終閲覧日 2019/2/15）
- ・「みやぎの法人」p9-10 クローバースファーム http://www.miyagi-agri.com/ninaitekyou/corporation/2014_web.pdf（最終閲覧日 2019/2/15）

また、担い手としての若手や、後継者の育成、さらに数名の新規就農者などもある程度存在し、10年先をみても地域農業を支える担い手が存在していると予測されます。

不安な要素としては、専業農家の技術継承が難しく、大規模化・集約化した農家の技術は習得されていきますが、専業農家の農法や技術が引き継がれないことです。また兼業農

家においてそのまま担い手がいるのかという問題があります。主な生産物は米や大豆、トマトなどですが、もともと七郷地区は稲作農家が多いので、水稻栽培を中心とした大規模な土地利用型農業がおこなわれ、圃場整備によって生産効率は上がっています。ただし、米価の下落や減反廃止などの経済動向や農政転換などにより、収益見通しが不透明になりやすいことと、大規模化したがゆえに生産設

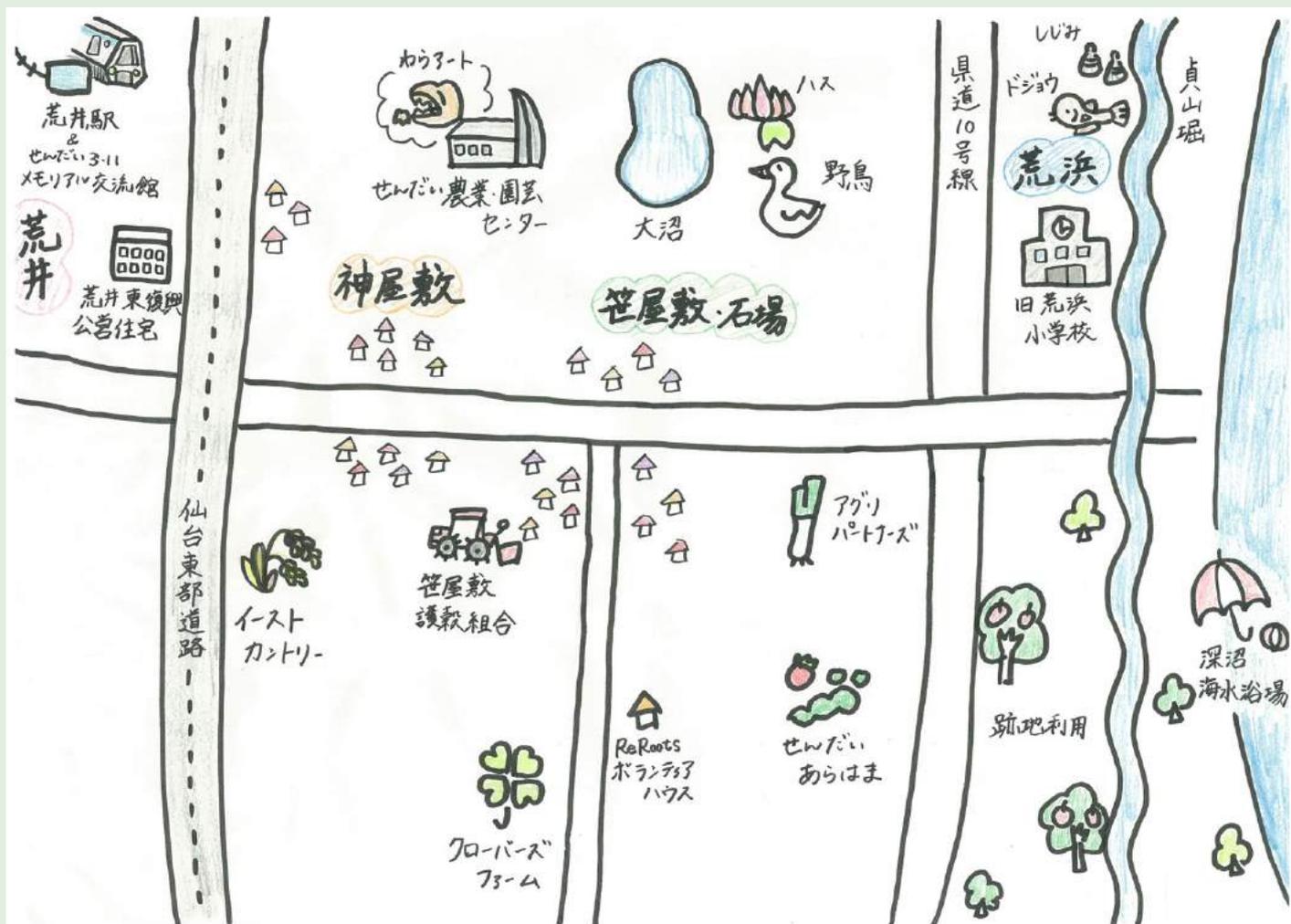
備の投資規模が大きくなり資金繰りが大変になることが不安要素としてあります。

見通しとして、今後10年間は現状維持状態が保たれるでしょう。新規就農者も数人いるため、その力を引き出すことができれば、新たな活力を生むことは十分考えられます。法人と新規就農者の協力や取り組みがあれば、七郷沿岸地域の持続する農業は可能であると見通せます。

○地域資源

七郷全体では、荒井駅周辺の開発がすすみ、東部道路の東西を境に都市部と農村部の違いがはっきり分かれてきています。荒井駅周辺

はメモリアル交流館、病院やスーパー、ドラッグストア、福祉施設、飲食店などの進出が相次ぎ、都市化が進んでいます。



一方、東部道路の東側には「農と食の交流拠点」である農業園芸センターが再オープンし、震災遺構の荒浜小学校や深沼海水浴場、荒浜地区の跡地利用がこれから進んでいくと考えられます。

したがって、東部道路の東西を考えれば、都市部と農村、震災遺構や農村風景、跡地利用など農村らしさを残しながら、様々な活用

を引き出せる可能性をもっています。

荒井駅のせんだい3・11メモリアル交流館と荒浜小学校を用いた防災ツアーや荒浜の跡地利用と農業園芸センターを活用した事業など、沿岸部に人を招き入れる仕組みを作るとは可能です。ここに、地元住民の農業や生活と結びついた取り組みができるかどうかが鍵となるでしょう。

※荒浜地区跡地利活用事業候補者一覧

事業候補者	事業内容	面積 (ha)
仙台ターミナルビル株式会社	体験型観光果樹園 子供から高齢者まで多世代の交流、団体客、インバウンド等、広域からの観光流動を生むことで、新たな賑わいを創出し被災地復興に貢献	11.0
一般社団法人 仙台スポーツネットワーク	スポーツ、レクリエーション施設 サッカーや野球、キャンプなどスポーツとレクリエーションのコラボレーションで新たな賑わいを創出	19.5
荒浜のめぐみキッチン	農と食の体験学習 農業、自然、地域文化を活用した体験プログラムを通じて、仙台市内外からの来訪者、海外からの来訪者に対してこの地域固有の体験を提供	0.5
荒浜復興推進協議会 「イナサの風」	クロマツの育苗 松並木の再生と松の育樹会の開催などにより、地元住民との関わりを通して、地域の文化や震災の記憶・経験の継承につながるような交流を創出	0.3
株式会社深沼アグリサービス	養鶏、農業（畑） 元住民などが荒浜の名産品となる農畜産物（有機野菜、烏骨鶏の卵）をつくり、津波で失われてしまった荒浜のことを伝えていく	0.5

出典：仙台市 HP 「仙台市東部沿岸部の集団移転跡地の利活用に係る第1次募集の事業候補者の決定について」
<https://www.city.sendai.jp/fukko-jigyo/rikatuyo/oubo-kekka.html>（最終閲覧日 2019/2/19）

六郷沿岸地域について

○コミュニティの状況

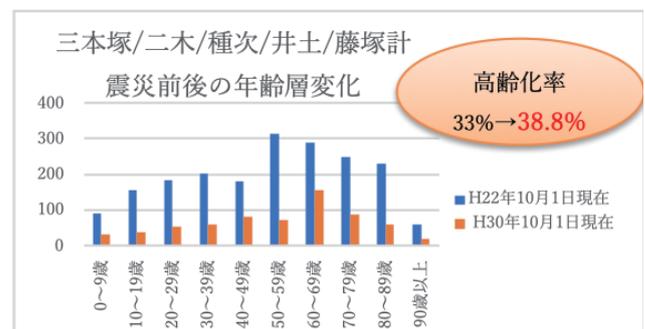
二木・種次・三本塚・井土・藤塚の5集落で構成される六郷東部地域は、震災前700世帯の住民が暮らす地域でした。(H22.10.1)震災後、家や農地を流され避難していた住民の多くは東部道路の西側へ移転しました。藤塚地域では防災集団移転が行われ、井土地域では居住禁止区域の変更が行われたこともあり、震災後六郷東部地域は254世帯にまで減少しました(二木51世帯、種次94世帯、三本塚102世帯、井土7世帯、藤塚0世帯)(H30.10.1)。人口660名中257名が65歳以上の高齢者であり、高齢化率は38.8%にのぼります。

震災後地域の町内会活動は再開されましたが、地域の課題で大きいのは過疎・高齢化

○農業

六郷東部地域の農業において焦点となるのは「後継者不足」です。三本塚・二木・井土・種次・藤塚の5地区には、専業農家が8軒・農業法人が8団体・若手農家は6名(2016年ReRootsの聞き取りによる)います。10年後の六郷を考えると、若手がいるところでは世代交代が行われますが、現在生産に携わっている方の多くが今のように働くことは難しくなると思われます。法人に集積されない農家の耕作地が耕作放棄地になってしまう可能性が高く、美しい農村風景が失われる

の進行と10年後を見据えたときの地域の担い手不足や相互扶助の慣習の薄れです。背景には2013年の東六郷小学校閉校により、地域の拠り所が消えてしまったことがあります。10年後を考えれば、今の現役世代も引退し、さらに高齢化率も高まります。

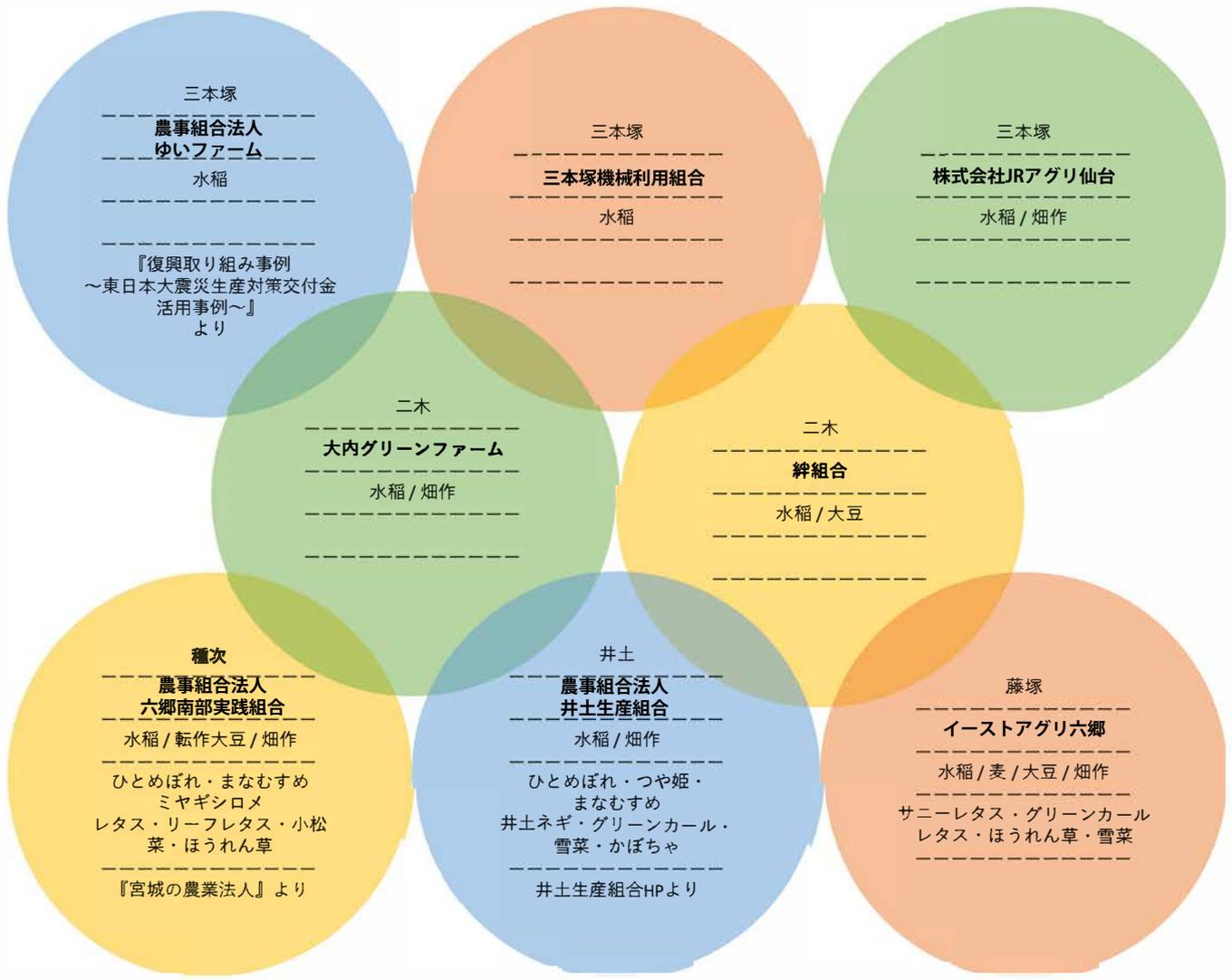


・仙台市 HP「町名別年齢(各歳)別住民基本台帳人口」
<http://www.city.sendai.jp/chosatoke/shise/toke/index.html> (最終閲覧日 2019/2/10)

危険性があります。

ただし、六郷東部地域の農業技術は非常に高く、目を見張るものがあります。それを継承できずにいけば、仙台市の農業、ひいては日本の農業の視点から見ても大きな損失になってしまいます。消費者が野菜の魅力に気づく機会が少なくなってしまうのは非常にもったいないことです。なんとかしてでも守らなければなりません。ここに、後継者として新規就農者が“農村に”就農できる仕組みが必要であると考えます。

○各地区の農業法人の一覧と概要



- ・復興取り組み事例「ゆいファーム」

http://www.maff.go.jp/tohoku/osirase/higai_taisaku/hukkou/pdf/yui-farm_h2503.pdf

(最終閲覧日 2019/2/19)

- ・井土生産組合 HP <http://www.idoseisan.net/> (最終閲覧日 2019/2/19)

- ・南部実践組合

http://www.miyagi-agri.com/ninaitekyou/corporation/2017_web03_RokugouNanbu.pdf

(最終閲覧日 2019/2/19)

○地域資源

六郷沿岸地域には井土のあし原、井土浦、貞山堀、海岸公園冒険広場、馬術場などいくつもの資源があります。特に昔から住民の生活と深く結びついている豊かな自然がこの地域の特徴です。

居住者の減少や生活様式の変化から現状ではこれらの資源は活用されないまま残されています。このような自然は、裏を返せば「何

もないが何でもある」という無限の可能性があり、釣りや自然観察などが好きな人には非常に好まれます。

今後の課題は、これらの資源を住民の生活と結びつける形で再生させ、文化の維持を行うと同時に、地域の魅力を外部発信し、いかにして地域のコミュニティ活性化につなげるかです。



農業

現在

六郷
三本塚以外の地域では
後継者不足



七郷
各集落に中心となる法人
若手の存在



10年後

法人の後継者が
登場するかどうか不透明

世代交代が進むが
徐々に問題が表面化

農業後継者育成や新規就農者を増やししながら
法人の担い手を育成する仕組み作りが必要

コミュニティ

現在

六郷
高齢化の進行で
地域行事の低迷



七郷
ほぼ被災前の
町内会活動、祭りが再建



10年後

過疎化から限界集落への危機

高齢化と過疎化がゆっくりと進行

六郷で地域福祉や移住の仕組みを先んじて作り、
七郷へ波及できる仕組み作りが必要

地域資源

現在

六郷
農村文化や自然といった
素朴な魅力がある



七郷
都市化した荒井駅周辺、
荒浜小学校、農業園芸センター、
荒浜の跡地など豊富



10年後

地域資源として
発信されるか未知数

跡地利用事業者も加わり
資源を生かした取り組みが
行われる見込み

七郷では荒井と沿岸部を結び付ける仕組み、
六郷では自然を活かした仕組みづくりが必要



◇発行：一般社団法人 ReRoots

◇代表：広瀬剛史

◇住所：宮城県仙台市若林区荒浜字今泉 59-3

◇電話：022-762-8211

◇メール：reroots311@yahoo.co.jp

